

# 研究通信

No. 51

1965・4 刊  
村落社会研究会  
事務局

甲府市武田四丁目  
山梨大学学芸学部  
社会学研究室内

## 村研拡大委員会報告

去る三月十二日（金）慶応義塾大学において拡大委員会を開きました。出席者は、有賀喜左衛門、小池基之、田野崎昭夫、米地実、大淵英雄、服部治則  
議題は、昭和四〇年度大会の件、年報「村落社会研究」第一号の件などであった。

### (A) 昭和四〇年度大会の件

本年度大会の件について、先ず事務局より通信第五〇号（一月発行）のアンケートの結果を報告した  
一、大会の持ち方について（回答数一九）

- A 共通課題のみ 三
  - B 自由課題のみ なし
  - C 共通課題・自由課題両者 一四
- 回答なし 二

### 二 共通課題

- a 「村の解体」（但し条件付のものを含む）一六
- b その他 二

イ、「独占資本と村落」又は「社会開発と村落」

（神谷氏）

ロ、「都会地の農家」（大坪氏）

### c 特に意見なし

右の結果で見られるように「むらの解体」が多かつたが会員数（二三〇）、会員全部に通信発送）に比して回答数が少ないので、全会員の意見が得られるよう、も一度通信を出して確かめ、その返答を待つて四月中に委員会を開き、決定することにした。

なお、アンケートの結果を、各会員の意見をそのまま通信に載せて、全会員の参考に供することとした。

### (B) 年報「村落社会研究」第一号について

#### 一、年報発行の時期

大会のかなり前に発行して（希望としては八月中旬）、これをもとに本年度の大会をもつ。従つて、大会以前に年報第一号掲載論文の批判を含めて研究会を開きたい。そのために四月中に編集の仕事に着

手したいので、執筆者には三月一切を厳守して戴くよう、事務局から念のため願状を出すこと。

### 三、年報編集委員会事務局

編集委員会は本年度大会で決定するまで、暫定的に拡大委員会において執行し、編集事務局を慶応大学とするが、編集事務についての連絡先（原稿の送り先）は次の如くとする。

東京都港区芝三田二ノ二

慶応義塾大学第三研究室 気付

村落社会研究会年報編集委員会

なお、編集委員会を開く場所は、慶応大学ではしばしば集合するに必ずしも便利とはいえないので、本郷付近で行うこと。場所のあつせんは中野卓氏に依頼すること。最後の二回は春木町中央会堂内稿書房でできるより交渉すること。

### ①課題研究会について

先のアンケートに寄せられた住谷・矢木氏などの意見にもあつたように、大会の討議・論点などの共通化が重要であり、その為に予想される報告の内容についての研究会を開くことが必要である。例えば本年度も「村の解体」がテーマになれば、昨年の成

果をいかに吸収するか、又かりに別のテーマになつたとしても、それについて討論を重ねておくことが必要である。従つて、出来るだけしばしば研究会を開いて、報告者及び問題をもつ会員の報告をきいて問題を固めていきたい。この研究会は編集事務進行に並行して行なう。

### ② 大会の開催時期・場所について

一、時期  
日本社会学会（十月九日（日）於東北大学）の前後とすること。なお、教育社会学会（十月二日（出）三日（日）又は十六日（出）十七日（日）於東京学芸大学）に出席する会員がかなりあるので、それをも併せ考え、十月五日（出）六日（出）又は十月十三日（出）十四日（出）がよいのではないか。（注 委員会以後の判明の情況では前者になる模様）

### 二、場所

山梨県内にもつこと。事務局において場所をあつせんのこと。

### ③ 山岡・神谷氏の著書について

最近、会員山岡栄市氏、神谷力氏の著書が出版されたので、村研通信で紹介すること。

島崎稔氏又は田野崎昭夫氏に書評を依頼すること。

(以上三月十三日議事)

◎ アンケートの意見

通信第五〇号のアンケートについてよせられた意見を次に掲げますので、御参照の上、御意見のある方は、四月三十日まで事務局あて通信を下さい。

○ 喜多野清一

共通課題・自由課題の両方を揃える方やはりよろしいかと存じます。共通課題については、名案もありません。「村の解体」も長くつづいていようですが、包括的な題目ですから、自ら参加者が集点を絞つて来られることでしょう。

○ 住谷一彦

(一) 大会のもち方 私はここ数年は「共通課題」のみで、シンポジウム形式をとることに賛成です。ただし、その場合にはあらかじめ準備委員会を構成し、長期計画をたて、問題の積重ねと展開が可能であるように、慎重な討議をおこなうことを希望します。そうして会員のすべての心にひそむ共通の関心をさぐりあて、それをひきだすことからはじめないと、この非常事態へ

村研の)を乗り切れないでしょう。

(一) 共通課題・a「むら」の解体」で結構です

が問題はそれと取りあげる方法ないし視角そのものを深めるかたちでやらないと生産的とならないでしょう(事例報告の積上げでは……)

○ 矢木明夫

一 大会のもち方 ○両者

二 共通課題「むら」の解体」、なお三十九年度の経験より共通課題の共通討議の集点、方法

等につき、何らかの方法で十分な準備をしておく方がよいと思われませんがいかがですか。

○ 柿崎京一

一 大会のもち方 ○両者

二 共通課題「むら」の解体と再編成「昨年は

「解体」について十分な討議がなされなかつたので、継続されることを希望します。と同時に新たな組織編成についての問題をも併せて討議されるとよいように思われます。

○ 勝又猛

一 大会のもち方 ○両者

二 共通課題「むら」の解体」の継続研究に賛

成です。いろいろの問題が未解決になつていま  
す。継続研究でみのおおきものとする一方、  
「むら」の研究をすすめる上にさらに重要な手  
掛が得られるものと思う。

○ 山本登

最近農村関係については、まづたく不勉強で、  
意見の申し上げようありません。現在のテーマ  
は主として都市研究における社会学の手法といつ  
たところです。そうしたわけで「むら」の解体と  
いつたことに興味はもつのですが。

○ 内藤莞爾

強羅の大会に欠席したため「ムラの解体」の内  
容が判りませんが、継続すべき問題を残すならば  
それで結構と思います。私は共通課題だけとい  
と考えています。

○ 大坪省三

- 一、 C 両者、但し共通課題を主力として
- 二、 これと明示はできないのですが、農業地域社  
会と非農業の地域社会とで、現在社会構造や人  
々の意識が違ふなら、それを「都会地」の「農  
家」でどう現われているか、そのような研究を

お聞きしたいと思ひます。

○ 神谷力

一、 大会のもち方 C 両者

二、 共通課題「独占資本と村落」又は「社会開発  
と村落」

以上の他、回答を下さつた方は、次の通り。

田野崎昭夫、村武精一、浜島朗、大山彦一、

島田隆、川口諦、井森陸平、山岡栄市、川俣茂

後藤和夫（順序不同）

◎ 事務局より御願ひ

研究通信第五〇号で御願ひしましたアンケートに  
つき、右に記しましたように回答をいただきました  
が、拡大委員会では、会員二三〇名中、二〇ほどの  
回答ではテーマを決定できるかどうかとの意見もあ  
りましたので、改めて御意見を御伺ひします。御意  
見のある方は四月三十日までに事務局へ御通知下さ  
い。

なお、本年度大会報告希望の方は、題目と共に五  
月十五日までに御申出願う予定です。拡大委員会の  
報告に記しました如く、大会前に研究会を開くこと

になりますので、早い目に申し出て戴ければ好都合です。

※ 紹介 ※

山岡栄市著「漁村社会学の研究」一九六五年  
本書は、著者がこれまで行つてきた漁村社会の研究を体系的に整理するとともに、こんごのさらなる研究への基礎を構築したものである。内容は漁村社会研究の学論を扱つた序論、漁村における家族その他の諸集団と、意識や規範とを扱つた漁村社会構造論、一方における漁業の資本主義による変化と他方における漁村の後進性とを扱つた漁村社会変動論、さらに漁村における共同体論、経済史的変遷、離島村落（隠岐島）などを扱つたモノグラフを中心とする雑篇からなつている。

著者は農村について農村社会学が成立しているのと同様に、漁村についての「漁村社会学」の成立が可能であるとし、これを一、漁村を農村との連続面において把握すること、二、漁村を都市的市場圏との関連において把握すること、三、漁村をとくに共同体として把握すること、の三つの視点に求める。

内容は広汎であり、紹介すら充分に行うことは難しいが、随所に著者の体系的な漁村社会学を樹立しようという姿勢と意欲が伺われる力作である。とくに著者のくわしい山陰を中心とする裏日本（内日本の漁村が実証的基礎をなしており、そこから著者の漁港漁村・砂浜漁村・廻船漁村の三類型が構想されている。

ここで感想をのべさせて頂くならば、右の三視点のうち「三」がかなりつよく感じられた。

「一」はむしろ農業とのこれ（家族労働力の配分・耕地山林の総有の問題として）と思われる。また「二」は労働力・資本・水産物の各市場圏としてとらえられるが、このことは漁場が他面その拡大によっては漁村共同体を解体する作用をももつていふことと関連して、漁業都市の社会学を発展させる可能性が考えられる。ともあれ、山形・新潟以外は主として東日本の太平洋岸の漁村しかしらない。評者にとってはきわめて教えられるところが多かつた。

（田野崎 昭夫 記）

※ 紹介 ※

武井正臣・熊谷開作・神谷力・山中永之佑共著

「日本近代法と「村」の解体」一九六五・二刊

本書は明治地方制度の実態をつかむために、戸長役場時代の記録、三新法期の寄合記録、区会の記録、入会関係の資料などを踏査蒐集しての研究である。大小区制期・三新法期・戸長管区制期を通じて各地で展開された地方制度が、中央政府の意志に対していかに順応し、いかに抵抗したかを比較考察しようとしている。序章統一的な地方制度へのみち（熊谷）、第一章「村」の組織―維新の「村」から町村制の村へ―（大阪府―山中、愛知県―神谷）、第二章「村」の財産（武井）、第三章町村制と家の運命（熊谷）、第四章総括（熊谷）という構成をなし、村の組織の事例として大阪府と愛知県の例を、「村の財産」の事例として阿蘇の例をあげている。

左の著書を村研会員に割引して頒布致しますので多数お申し込み下さい。

山岡栄市著「漁村社会学の研究」大明堂刊、定価一三〇〇円、村研会員の旨申添え送料共一一五〇円送付のこと。振替東京一五二七〇

武井正臣、神谷力ほか著「日本近代法と村の解体」法律文化社刊、定価一一〇〇円。村研会員の旨付記して、直接申込二割引（八八〇円）送料申込者負担、振替京都一〇六一七（京都市北区紫野宮東町九番地法律文化社）

#####

左記の方の住所不明ですので御承知の方は御知らせ下さい。

#####

河野哲也（早稲田大学）

田中幹夫（東北大学）

樽松静江（奈良女子大学）

#####

住所変更は事務局の方へ御願いたします。